

4つの柱で行う卒後支援の取り組みについて

リアン文京 放課後等デイサービス びおら
岡部 悠介

1 問題意識と課題

放課後等デイサービスびおら（以下、びおら）は中学から高校までの障害児童を対象としている。この年齢層は思春期の多感な時期であり、周囲の様々な人たちとの交流体験を通じて成長し、青年前期のライフステージへと移行していく。

彼らは、特別支援学校を卒業すると同時に、福祉施設か一般就労という二つの進路選択の岐路に立たされる。その選択は、障害のない同年代の若者のようにモラトリアム期間を持つ余裕や様々な社会体験を試行錯誤する機会が保証されない。

思春期青年期は、周囲の大人や仲間たちとの交流を通して自己を確立していく時期である。在学中は、学校、家庭、放課後等デイサービスなど本人を取り巻く社会関係の中で様々な体験プログラムが少なからず用意され、様々なことにチャレンジし、自分自身というものを見つめ、自己効力感を高め、自分というアイデンティティを確立するは準備を始める。このプロセスは、当然、発達の緩やかな一定の期間に成熟していくものであり、一人ひとりの体験や学習の質と量の違いにより、個人差が大きい。そのため、必要なのはタイムリーに、当人のパーソナリティや障害特性に合わせて、必要な心理社会的な支援を継続的に提供できる社会的なしくみが必要となる。ところが、18歳以降、特別支援学校を卒業するとともに、彼らの抱えている課題は全て克服されかのように、極端にその社会関係の幅や心理社会的サービスを縮小させてしまう。

そして、卒後の障害者は18歳までに獲得、適応できない発達上の課題やつまづきを有しながら実社会へ出ていくことになる。福祉施設はそれでも一定の発達上の課題に対応する場をもつが、企業に就職した場合は、その障害特性に応じた支援の専門的知識・スキルが不十分であり、企業組織・文化に馴染めず社会不適応を起こしてしまうケースが続発しており、大きな社会問題となっている。

いずれにしても、思春期、青年期は様々な社会体験や交流を基盤に自己を確立する時期であるにも関わらず、多くの者が家と会社または福祉事業所の往復の生活であり、限定された人間関係の中で生活せざる負えない状況にある。相変わらず地域社会の中で生活しているとは言い難い状況であり、特に、学校時代の同世代の友人関係はほぼ完全に分断され、同世代の仲間を形成することは難しくなる。

エリクソンは、青年期を実社会の中で様々な体験をし、自らの権利行使や社会資源とのつながりを通じ、自分自身のアイデンティティや社会への帰属意識などを高めていく時期であるとしている。

びおらの役割は、思春期、青年期の課題である自己効力感を高め、アイデンティティの基盤をつくり、社会に巣立つ力を育成することであり、さらに、次の青年前期を

様々な課題を抱えながらも一人の社会人として健やかに成長できるよう継続的に支援していく事が求められる。そのためには卒業支援としてのアフタフォローの課題解決型のアプローチを卒業後も継続的展開していくことが重要と考えている。そこで本報告は、びおらが取り組む「4つの柱で行う卒業支援の取り組み」についていくつかのエピソードを述べながら報告する。

2 放課後等デイサービスびおらの方針

放課後等デイサービスとは、障害のある就学児童（小学生・中学生・高校生）が学校の授業終了後や長期休暇中に通うサービスである。障害児の居場所対策、障害児の学童クラブとして法整備された背景もあり、障害児の居場所対策としての意味合いが高く、その反省からスポーツ・造形・パソコン等の事業所独自のサービスを展開する事業所も増えてきた。

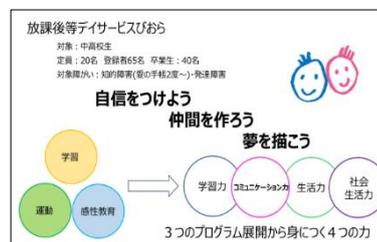
その中で、びおらは知的障害、発達障害の中高校生(定員 20名)を対象とし、「自信をつけよう 仲間を作ろう 夢を描こう」をスローガンに、学習・運動・感性教育の3つ軸としてプログラム展開をしている。結果として学習力、生活力、コミュニケーション力、社会生活力の4つの力を育てている。

学習では、公文教育研究会の教材を使用し、国語・算数などの学習を行っている。また、発達課題に応じて、パズルによる集中力、目のトレーニング、各場面のコミュニケーションや態度を養う SST（社会適応訓練）をはじめ、労働体験として地域での販売体験や受注作業などを行い、集中力、課題解決力、手指の巧緻性を高め、将来的に必要な作業力の向上を図っている。

運動では、ボッチャ、ドッチビー、ヨガ、バスケットボールなどを行い、特にチームプレーに着眼を置き、仲間と力を合わせる事、忍耐力、発信力、課題解決力の向上を図っている。

感性教育では、感受性を豊かにするために、アート活動、ダンス、和太鼓、英会話、リラクゼーション、イベント、マインドフルネスなどを導入し、気づく力の向上を図っている。

これらの学習・運動・感性教育に加え、見たことがある、知っている、聞いたことがある、やったことがある、できる、といった経験の機会を増やし、「やってみたい、できるようになった。」といった成功体験の積み上げることに着眼を置いている。13歳から18歳までの思春期・青年期においては自己効力感やアイデンティティの確立が重要であり、人と人との間で揺れ動く時期だからこそ、当人ペースに合わせ、一人ひとりの能力を伸ばすことから始まり、徐々に仲間意識へ繋げ、同学校の友達から他学校の友達そして、中1から高3という他学年との繋がり、地域(外社会)へ目を向けていけるよう支援している。



3 卒後の4つのエピソード

エピソード1「発達段階の積み残し」

A君は卒業し自立支援事業に通っている。通所途中でバスの中で会う異性を好きになり、バスの隣に座り、じっとその女性を見つめてしまう。その結果、相手に不安を与えてしまい、通報され、A君は警察で取り調べを受けることになった。でもA君にはなんで好きな人の横に座って見つめちゃいけないのか理解できない。

そこで、びおらに相談があり、本人自身の気持ちへの気づきと、実際に人との距離の取り方について具体的に伝え、ロールプレイを行うことになった。相手の気持ちについて考える時間を作りディスカッションをした。指導するという立場ではなく、A君を受容し、理解を示し、一人の大人として助言するという立場で接している。異性間については学生時代からの課題でもあり、びおら利用中も距離間や他者認識についてSSTを実施し、社会適応的な行動変容を促し、当時は気になる異性に対し同じ空間(適切な距離をとって)できるようになった。しかし現在ではA君自身の生活範囲の広がり、異性への興味関心がさらに広がった。A君の場合は、学習を一般化して応用することが難しい。そのため社会で遭遇する場面の個別事案について具体的に適応行動を示唆していく必要がある。今は、好きな人が出来た時は相談することになっている。A君は似て非なる場面を同じこととして理解し、社会的適応スキルを身につける段階に来ていることを踏まえ、今後もC君の発達段階に応じたスキルの継続的な習得を目指していく。

エピソード2「仲間づくり」

Bさんは卒後、企業に就労した。もともと内気で自分自身を上手に表現できない彼女は、職場での不適応を起こし欠勤が続いた。Bさんのお母さんから相談があり、びおらの卒後OB・OGが行う「びおらボランティア部」の活動に声をかけた。そこで、Bさんはに後輩の販売体験のサポート役をお願いした。かなりの緊張があり「できるかな…」と自信がない様子であったが、そんな時同世代の仲間から「大丈夫だよ。みんないる。」と声をかけられた。その瞬間、Bさんは顔を上げ「そっか。みんなもいるんだもんね。よし！できる。」と一歩前を出て仲間に販売会の準備の仕方を教え始めた。もともとびおらで行っていた販売会なので自信をもってサポート役を行えた。このことがきっかけでBさんはまた通勤できるようになった。今もOGとして時々、「びおらボランティア部」に顔を出し先輩ぶりを発揮し後輩のあこがれとなっている。

なかま集團の持つ、グループの相互力動的関係は当人のエンパワメントの向上に非常に効果をあげる。支援者との垂直な支援関係ではなく、当事者たちの水平の相互支援力に着目し、当事者たちのピアの力をもっと活用していく支援を行っていく必要がある。現在も仕事の失敗や職場での人間関係についてBさんは私たち支援員に相談する。たいていは支援員の「大丈夫。できるよ」の声かけに下を向いてしまうBさんだが同世代の仲間からの声掛けに、いつも元気と勇気をもらい、「そっか がんばる！」とエンパワメントされて帰っていく。

エピソード3「シェルター機能」

Cさんは、就職当初は、「働きます！OLです。」とキラキラした表情を見せていたが、2年目に入り仕事のミスや指導員との関係性、同期との関係性そして後輩ができたことで、プレッシャーを感じ押しつぶされそうになっていた。毎日夕方になると電話があり「今日は〇〇がダメだった」「今日は〇〇で怒られた」「ミスばかりする自分が嫌だ」など話していた。私たちは傾聴し、繰り返し肯定的な言葉に言い換えBさんに伝えている。未だ悩みは尽きない様子ではあるが、一回のやり取りで解決することではないからこそ、Cさんが本音をぶつけることができる場であり続けることで、一旦はスッキリして明日へ繋げているように感じている。気づけば社会人3年になり最近では「まだミスもするけど、〇〇に気を付けながらやれた。」といった前向きな言葉を聞くことが多くなっている。

卒後の障害者は常に未知数の未来を生きている感覚だと思ふことがある。一般化された人生経路が明示されているわけではなく、また、日常的な生活課題やライフイベントでの人生危機の対処を助言しサポートしてくる人と場所が現在の我が国には非常に少ない。日常のちょっとした欲求不満や生きづらさ感覚は累積した疲弊感情を生み出し、社会不適応を生み出す。颯爽と就職していったはずの卒園児たちが疲弊して親と相談に現れることが多くなってきている。ちょっとした愚痴や不満に寄り添える居場所としてのシェルター機能は、過去に安心安全感覚の基地となった放課後デイが積極的に担えればと考えている。

エピソード4「生涯学習」

卒後のDさんは、余暇に隔週水曜日の和太鼓教室「絆太鼓」に参加している。絆太鼓の仲間と挨拶を交わし、近況の話をしたりしながら、太鼓が始まると熱心に打ち込む。講師はプロの太鼓演奏家で演奏練習風景は全員が真剣そのもの。大舞台での演奏会も体験し、更なる向上心が芽生えている。仲間とともに学ぶ事で気分転換にもなっている様子。太鼓はシニアになっても続けることができる。多世代のメンバーとの幅の広い交流が生まれている。きっとライフワークの一つになっていくと推測している。

Dさんは、卒後適応できるかな？引きこもりにならないといいな、と心配する利用児だった。その彼にびたりとはまったのが和太鼓だった。卒後Dさんより「太鼓続けます。よろしくお願いします。」と直接話があった時は、これで彼は人生の荒波を乗り越えられると感じた。その思いの通り、「今では勤務先で失敗をしても繰り返し挑戦する力が身につき、自己肯定感が高まり、心が強くなった」と保護者より話をもらっている。生きがいに繋がる趣味・あそびなどのライフワークは多々あるが、楽しめるスキルと知識の習得、様々な体験ができる環境(選好の機会)の設定、障害特性に応じた参加障壁の改善(合理的配慮)の支援を誰が担うのか、これも大きな社会課題である。びおらでは現有のプログラムを生涯学習機能への延伸していくことがその一つの回答だと考えている

4 社会の中で一人の大人になっていく

びおらでは、青年期を「自ら地域社会の中で様々な人間関係を通して豊かな人生を送

ろうとする主体」へとステップアップしていく時期であると考えている。その中で健やかに青年期の生活課題を克服していくのに必要な4つの課題を挙げている。この課題は「4つのエピソード」で示したもので、びおらの卒園児たちの卒後の相談から浮かび上がってきた経験的な課題である。

即ち、(1)びおらでの思春期における発達課題の積み残しへの対応、(2)社会的環境の縮小(単調・平板な日常)への対応としての仲間づくり、(3)緊急避難場所としてのシェルター機能の場の提供、(4)学びの継続・生涯学習(大人としての遊びや学びの場)の提供である。この課題をもとに、びおらでは4つの柱で行う卒後支援の取り組みを行った。

(1) 発達段階の積み残しへの対応

利用児は、特別支援学校、家庭やびおらをはじめとする教育・訓練・支援機関の援助を受け、発達における様々な課題を克服し成長していく。しかし、一方で特別支援学校を卒業する18才以降も発達上の課題は全てが克服されるわけではなく、一部は本人の基本的な障害特性として生涯にわたって持続する。

あるいは、一部は逆に思春期特有の発達課題を抱えたまま卒業し、社会に巣立っていくことになる。そのため、企業に就職できても適切な支援が行われず、不適応を起こす利用児も後を絶たない。そこで、びおらでは卒後も社会とのかかわりの中で、実際に当人が抱えている現実的な課題に対応していくための社会適応訓練が必要と考えている。

現状の福祉サービスは教育と福祉の現場が断絶している感があり、特別支援学校を卒業した利用児の継続的な学びの場や生涯発達の生活課題に対して対応する支援の場があまりに少ない。成人になれば通常、社会的に行動範囲が広がり、自由な時間も増えていくが、彼らがその中で生き生きと自律して生活の主体者として生きてくためには、変わらず青年期、壮年期、高齢期における生活課題を一緒に乗り越える支援のあり方が問われることになる。

現在は、これらの対応は相談支援事業所が相談支援として担っているが、相談支援は地域社会に活用できる複数の社会資源を個人に提供できなければ、その相談支援は効果を発揮しづらいものとなる。

びおらでは、エピソード1で述べたように、卒業生対象にSSTや個別でスキルを教える機会をつくり、恋愛や結婚、交友関係、会社や家族の出来事、趣味や遊びについて一緒に考える場を設けている。これは、親や企業の間人関係ではなく、相談支援事業所や就労支援センターなどの職業的な関係でもなく、友人的な第三者としての関わりと位置付けている。



写真1 感情に気づく取り組み

写真2 いろいろあるストレス解消法

(2) 仲間づくり

卒後、利用児は家庭と福祉事業所・企業の単調な社会構造の中で生活を送ることになる。そして、この構造から地域社会の豊かに人間関係の構築にはつながっていかない。単調な社会で生きる彼らにとって、同世代との繋がりは希薄化していく。私たちは学生時代の仲間と飲みに行ったり、連絡を取り合うことができるが、彼らはなかなか同世代の仲間との繋がりを持続する機会を持ってない。

そこで、地域の様々な世代や同年配の方との交流事業を企画している。例えば、現在びおらと利用している方と卒業生と一緒に参加できるダンス教室や和太鼓教室を行っている。和太鼓教室では他世代間交流の一環としてシニアの和太鼓教室や地域の和太鼓団体と共同発表会や特別支援学校での出張演奏も行った。

地域の方に見てもらえる、聞いてもらえることから、地域で会った時「太鼓の子だね。とても上手だったよ」と声をかけてもらえ、学校での演奏では、在籍していた学校での様子とは違った姿を見せ、先生たちから「かっこいいね」「がんばっているね」と言ってもらえる事がさらに彼らのモチベーション、自己肯定感を向上させている。

また、エピソード2で述べたように私たち支援員では、彼らの心を動かすことができなくても、同世代の仲間からの言葉に耳を傾けやすく、さらに心に届く場面が多くある。共に過ごした時間から仲間ができさらに、卒後も「ここに来れば仲間がいる」といった気づきを持って、卒後も居場所となり、顔の出せる場所として存在している。また対人関係で悩みを抱える方も多く、恋愛話や仕事の愚痴など聞いたり、話したり、私たち支援者は一人の大人として助言をしている。



写真3 和太鼓教室～絆太鼓～



写真4 大舞台で太鼓とダンス発表

(3) 緊急避難場所としてのシェルター機能

仲間づくりでも述べている様に同世代との繋がりは希薄化していく中で、インフォーマルな場所、本音で話せる場、依存できる場が必要である。SOSが出せる場として、居続けることが必要である。私たちにも、本音で話し、悩みを相談でき、愚痴を吐ける場所や仲間がいる事で、世の中を知らながら日々過ごすことが出来ている。障害の有無ではなく、彼らにも感情を吐き出せる場所が必要である。しかし現在地域資源として、発信できる場が少ないことで引きこもりになることや、感情を抑えきれず、粗暴行為や非行に走ってしまうケースも多い。

エピソード3で述べたように、一時の感情を発信でき、スッキリすることで「また明日も頑張ろう」と思えることが大切であり、困ったときは頼ることができる場があるからこそ、日々邁進でき、そして他者にも思いやりを持つことができるようになる。依存できる場があるから日常(仕事)で力を発揮する事もできている。

(4) 生涯学習

青年期になれば、おとなとしての学び、おとなの遊びの場づくりが大きな課題となる。びおらでは、これを①生産活動、②趣味活動、③地域貢献活動の3つの柱で自主的のサークルをつくり、卒後者の余暇支援・生涯学習として行っている。

①生産活動

生産活動では、実際に何か販売できるものを制作して、地域バザー等で販売しに行っている。社会に出て企業で働く者でも、福祉事業所で活動する者でも、所属する組織や機関のメンバーとは違う友達と共に行うバザーや販売会は違った意味での楽しみや醍醐味を感じる様子がうかがえる。

仲間一人ひとりが感謝される場、存在を認める活動を作っていくことの意義は強調してもしきれないが、それぞれの所属する福祉事業者や企業が当人たちに感謝や承認を伝えているのか、改めて自らの現場とわが身を振り返る機会ともなっている。この違いは何かと考えて、彼らに聞いてみると「自由」「裁量」「無非難」などのキーワードが浮上する。就労の場が彼らの本来の持ち味を殺していないかは一度振り返ってみる必要がある。

絵を描くことが得意な方に対して、アーティスト育成を進めている。著作権の使用についても保護者同意の上、絵を描いてもらいイラストを用いた製品化を進めている。現在では、缶バッチ・マグネットを生産している。自分が描いた絵が製品となることで、イラストに対する意欲が増し、今まではお題を決めていたイラストのレパトリーにも幅が広がり、また彼の描きスタイルも柔軟さが増し加えて場面の切り替えもスムーズになった。目に見える成果物が彼の自己肯定感を高め更なる向上心へと繋がったのだと考える。



写真5 彼が描くにじいる動物

②趣味活動

趣味活動は、おとなの学び、おとなの遊びとして、また、特別支援学校や放課後デイサービスで行っていた学習や趣味活動の学びの継続として行っている。卒後の利用児は様々な趣味活動を一般の人と同質の内容で行うことができない。

例えば、英会話をネイティブスピーカーに学ぶ、ダンスをプロのダンサーからレッスンを受ける、創作活動をプロの工芸家に教わる、バイオリンを音楽家に習うなど一般の健常者と同様の内容で教授を受けるといった環境を地域に整えていくのも大切な役割と考えている。

現在、びおらではダンス教室、和太鼓教室、ヨガ、創作教室を行っている。仕事帰りにリフレッシュできる。またスキルを習得できる場を展開している。

私たち支援員では教えることのできないスキルを、専門の講師から学べる機会を作ることで、彼らの目の輝きは一層増し、そして習得率が高まっている。そして何より彼らの「楽しみながら学ぶ力」を養うことが継続的に出来ている。

③社会貢献活動

人間の幸せとは何かを改めて考えてみると社会関係の中で他者との相互の「感謝」「役立ち感」「愛情」の充足ではないかと考えている。少子高齢社会における地域共生社会のまちづくりの推進が求められているが、障害者の社会参加が一つの鍵となると思う。共生社会の要件は全世代が社会的包摂と多様性の中で共に社会を構築することに参加することだと思う。そのため、障害当事者がエンパワメントし、主体的に社会に参画するという自由を獲得することが重要である。

そのため、支援者側も利用児をサービスや支援の受け手として捉えるのではなく、積極的に社会へ参画する主体者として位置づけ、彼らと共に社会参加を推進する取り組みが求められる。ここでは二つの社会貢献活動、ア) タッチケアラー育成、イ) プラレール遊びの場を紹介したいと思う

ア) タッチケアラー活動

タッチケアとは、ボディータッチやアロマを用いたスキルである。現在、「一般社団法人 地域福祉アロマケアラー協会 CWA 認定タッチケアラー」という民間認証資格を私たちが利用児と卒後の障害者と共に研修を受け取得した。資格者として地域に出ていき、彼らと共に社会貢献の一環として、特別養護老人ホーム、企業、一般住民にタッチケアを施術することをはじめている。現在は、試行段階では無償で行っているが来年は有償で実施予定である。

最初は人に触れることへの抵抗感や緊張感があったが、人肌に触れ徐々に力を抜き緊張感が解けていく。今までは自分の気持ちだけで人との距離が近かった彼らも「どう？」など相手の気持ちを確認しあったり「上手だね」と承認し合う姿が見られている。言葉ではないコミュニケーションが生まれ、さらに仲間意識へと繋がっている。

イ) プラレール遊びの場では、リアン文京が開設時より力をいれ取り組んでいる多世代間交流がある。そこで、プラレールや電車が好きな利用児が組み立て、教え遊びの主催者となっている。好きだからこそ、楽しめる。詳しいからこそ伝えることができる。本人たちが主催者となるからこそ、意識が高まり、おもてなしの心を育むことができる。

実際は支援者よりも子供目線で一緒に楽しむことができる。これは、私たち支援者では、なかなかできない感性であり、人に寄り添いながらサポートしている姿は、私たち支援者にとっても学びであり感動する時間でもある。



写真6 タッチケアラー



写真7 プラレール遊びの場

5 考察

放課後等デイサービスの卒後支援から見てきたものを整理すると、1つは、卒後支援として青年期、特に社会に巣立つとされる青年前期へのソフトランディング支援機能

の必要性である。我が国の児・者の福祉施策の移行は、適応課題を抱えている一部の障害者を何の装備も食料も持たず社会というジャングルに送り出す感がある。この対策として、これまで述べてきた4つの卒後課題とその対応を中心とした放課後デイサービスは外延的機能として強化していく必要性を感じている。

2つめは、卒後支援を考える時に、放課後等デイサービスは、地域共生社会の主体的存在として障害当事者がどのように社会に参画していくのか、そのグランドデザインを放課後デイサービス事業は持つ必要がある。一人の生涯について障害特性を配慮した社会的支援は、発達段階に応じた縦割りの有期の支援だけでなく、一貫した継続的な支援体制が重要となる。特に、教育期間を卒業した後は「自立した成人」として捉えられる健全者文化の中で著しく取り残されている障害者の青年期以降の当人の生活の質の向上が、未だ本人に責任転嫁されてしまう「自立観」の中にある。「支援による自己決定」や「社会資源に依存することによって保障される選好機会」とそのことを持続できる生涯学習の資源開発が急務と考えている。

6 これからの課題

これまで、放課後等デイサービスにて卒後の取り組みを拡大してきたが、放課後等デイサービスとしての人、時間、場所の限界も見えてきている。今後は、更なる発展を目指すべく地域活動支援センターと連携した青年期の生活の質の向上としての仲間づくりや生涯学習の場の保障、当事者の社会貢献活動の推進を法内制度の枠組を超えて、地域の社会資源の一つとして開発していく事業展開を検討していく。